

4 「再読」とウィリアム・フォークナー

本稿において述べる「再読」とは、一度目の読みを反復することではなく、むしろ一度目の読みとの差異を創出する新たな一度目の読みを指す。

ヒリス・ミラー (Hillis Miller, 1928-) は「改稿」(revision) という言葉が、再ヴィジョン=「ふたたび見ること」の意味をもつために「再読」をも示すことを述べている。「再読」という行為は以前にテキストから読み出された解釈を再認するのみならず、その解釈に抗う差異をテキストに見出す契機となる。ミラーが重視するのは、そのようにテキスト内部に潜在していたものが発見されることによって、読む行為が「積極的、賦活的、生産的、創始的」なものとなり、新たに書く行為へと、つまり「改稿」へと接続されるような「再読」である。

書く行為や「改稿」といった言葉からは「作者」(author) の営為が想像されるが、読む行為がテキストの「空所」(gap) を「具体化」(concretization) することによってテキストの意味を積極的に生産するというヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser, 1926-2007) の指摘を踏まえるならば、一度目の読みとは異なるかたちでの「空所」の「具体化」によってテキストの新たな意味を創出する契機となる再ヴィジョンは、「読者」(audience) の営為でもある。再ヴィジョンという語が改稿／再読のいずれをも示唆し得ることを積極的に捉えるならば、ここでは書くことと読むことの区別が無効化されているのである。

再読／改稿の積極性を考える際、書くことと読むことの区別以上に重要なのは、「再読」がテキストの潜勢力を見出す積極的な行為となるためには、まず一度目の読みにおいて顕在化した文脈の全体像から、「権威」(authority) を剥奪する必要があることである。これはヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) が述べるような、元の文脈から引き剥がすことでその言葉自身の声に語らせることが可能にする破壊的な「引用」(quotation) といった行為や、全体像から疎外されていた部分を認知する契機となる「非随意的想起」(involuntary recollection) といった出来事によって可能となるだろう。一度目の読みから距離を取ることによって、「再読」は初めて賦活的な行為となり得る。

そのような再読／改稿の顕著な例として、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の長篇小説『サンクチュアリ』(Sanctuary, 1931) の創作過程が挙げられる。本作は1929年に完成し、出版社に預けられたが、偶然の重なった結果、完成から一年半が経過した頃になってから、ようやくゲラ稿が作者の元に届けられることとなった。ゲラを読み直したフォークナーはそのままのかたち

での出版を済り、修正と呼ぶにはあまりにも全面的な改稿を施したが、その主な手段は加筆や削除というよりも、ゲラ稿の切り貼りによってテクストの順序を再配置することで、挿話の配列を入れ替えるという編集的な作業であった。

当時を振り返ったフォークナーはゲラの到着時、一年半も前に書いた本作のことなど忘却していたと発言しており、ある企図のもとでテクストに挿話を配置した「作者」としてではなく、その企図とのあいだに距離をもちながら挿話群を想起するような「読者」として、ゲラ稿を「再読」していたと考えられる。この時フォークナーは当初『サンクチュアリ』テクストに想定していた文脈の全体像を破壊するようにして挿話間の関係を捉え直し、再ヴィジョンによって得られた新たな企図に従って、テクストの再配置を行なったのである。

その結果、出版された『サンクチュアリ』は、新たな企図を遂行しようとする端から当初の企図の断片化した痕跡たちが間欠的に反抗を試み続けているような歪なテクストとなったが、それはまた、本作がテクストの再配置というモダニズム的モンタージュ手法によって創作された名残として認めることができる。

このように読者としてのフォークナーと己の「作者性」(authority) の闘ぎ合いから『サンクチュアリ』という作品が生じてきた過程は、書くことと読むことの区別が無効となるような再ヴィジョン＝再読／改稿の瞬間を垣間見せてくれる。

(岡田 大樹)